

戦国期常陸国江戸氏領絹衣相論に窺う

都鄙間権威・権力・秩序構造

鈴木 芳 道

問題の所在

戦国期、常陸国水戸を拠点とした江戸氏領下で、天台・真言両宗間に真言宗の素絹衣着用をめぐる一大相論が起きた。所謂絹衣相論である。相論は、天台宗に勅許されたとする素絹衣の着用を真言宗が行なったために、天台宗がこれを京都本寺を通じて奏聞し、正親町天皇綸旨と織田信長朱印状の発給に至ったというもので、古くは渡辺世祐氏^①、一九六〇年代前半に宮田俊彦氏の専論がある。また宮田論文の前年には『水戸市史 上巻』での今枝愛真氏の論考^③があり、その後『茨城県史料 中世編』での家分けによる解説や『茨城県史 中世編』^⑤において適宜触れられている。渡辺・宮田両氏の研究は、多くは書状で無年号である関係史料の年次確定を行ないつつ相論の経過を追跡したもので、以後の基本文献となっている。また今枝氏も相論の経過を手際よくまとめている。しかし『茨城県史料 中世編』の解説が部分的に新説を加えてはいるものの、三氏の研究以後その克服をめざした研究は現れず、研究はその後大きな進展をみていない^通。

ところで、年次確定に若干の相違はあるものの、これまでの研究により相論の経過はほぼ語り尽されたといつてよい。刮目すべき新史料が発見されない限り、いまたんに経過を追うのみでは生産的ではない。相論は、諸大名・

領主権力の自立性と独立性が論じられる戦国期、常陸国江戸氏領下で起きたに関わらず、両宗それぞれの京都本寺を経て綸旨・信長朱印状の発給にまで至ったことを特徴としている。相論がここに至ったのは、相論に関わる者の属する權威・権力・秩序構造に拠る所が大きいといえる。即ち絹衣相論の過程は、戦国期の公武寺社の、また関東と京都との權威・権力・秩序構造の反映なのである。しかし、これまでこうした点をつよく意識した論述はみられない。すでに先学の諸成果に明らかのように、相論は綸旨の発給を節目として展開していく。そこで、先学に対して屋上屋を架すを否めないが、本稿では相論の経過を(一)天台宗が奏聞した天文二十四年七月後奈良天皇綸旨、(二)真言宗の意向に沿った天正二年七月の柳原資定謀書綸旨、(三)本稿で信長が干与したと考える天正三年八月と同四年六月の正親町天皇綸旨の三段階に区分し、そしてこの相論を通じてこの頃の関東と京都との間の權威・権力・秩序構造を明らかにしていきたい。

一、天文二十四年七月綸旨と絹衣相論

室町・戦国期の常陸国における天台・真言両宗の展開は先行研究に詳しく⁽⁶⁾譲りたいが、ひとくちに言えば、平安初期の草創と伝える河内郡逢善寺や茨城郡薬王院、南北朝期の創建である真壁郡千妙寺、平安初期に法相宗系として創建され、永享二年(一四三〇)に改宗した茨城郡月山寺などを中心とする伝統的に天台宗の勢力下にあった所に、南北朝期以降、茨城郡佐久山淨瑠璃光寺を本寺とする佐久山方と新治郡宝蘭寺を起点とした実勝方と呼ばれる真言宗の法流が領主権力と結び付いて発展し、天正十二年(一五八四)青蓮院門跡尊朝法親王をして「台宗之移于真言門数輩在之云々⁽⁷⁾」という情況になっていったのである。また応仁・文明の乱により洛中・洛外の経済基盤を損なわれた両宗の京都本寺は関東の宗門を頼み、末寺の再編にのり出す。天台宗では天文十九年(一五五〇)に門跡尊鎮を失った青蓮院が同二十一年に茨城郡水戸吉田山神宮寺(薬王院)に充て「就近年乱世、門跡領御不知行、

御殿并御法流等既及退転之条、以御一流宗跡之合力、真俗再興之儀憑思由」とする令旨を発給し、また門跡死去に伴う三昧流断絶の危局に、千妙寺亮玆は同二十一年に曼珠院寛如准后から上洛・入檀の叡慮を受けてそれに応えた。⁹⁾さらに元龜二年（一五七二）の織田信長の比叡山焼打以降の山方（比叡山延暦寺）・都方（青蓮院等々）の退潮により、関東田舎天台が教相・事相両面の伝統を保持して常陸国より上洛し、畿内僧が修学のために下向するという事態になっていった。真言宗では東寺・醍醐寺僧の関東での印可・付法の旅が相次ぎ、常陸国では佐久山方が流伝した北部・東部、実勝方が流伝した新治郡を中心に霞ヶ浦北西部を廻り、さらに江戸氏との所縁では茨城郡水戸和光院が醍醐寺行樹院澄恵・同慈心院俊聡・同無量寿院梵雅より松橋流を、和光院・水戸藤福寺・茨城郡六反田六地藏寺が醍醐寺報恩院源雅より報恩院流を伝授されている。¹⁰⁾また常陸国からの上方修学も相次いだ。天正初年の政情も図1のように北部の佐竹氏が優勢でありつつも、中南部では諸氏が割拠していた。

右の情勢の中、相論は史料上まず天文二十四年七月に信太郡江戸崎不動院が真言宗素絹衣着用不可の後奈良天皇綸旨を獲得し、のち元龜二年には河内郡逢善寺定珍が『素絹記』¹¹⁾を著わして真言宗を批難した。次いで天正二年に至って江戸氏領水戸で大きく動く。本章では、(1)相論の地理的範囲を江戸氏領下に限定した上で霞ヶ浦南岸の二寺が動いたことの意味を考え、次に(2)素絹衣着用の意義について言及したい。

1、天文二十四年七月綸旨と水戸天台宗

絹衣相論が史料上に現れるのは天文二十四年のことである。信太郡江戸崎の天台宗不動院が比叡山延暦寺に上り、東寺門徒（真言宗）が素絹衣を着用していることについて不審を訴えたのである。訴えを受けた延暦寺月蔵坊が真言宗さらに朝廷へ申し伝えた所、同年六月二十六日付で金剛幢院真永（法名嚴助）は真言宗素絹衣着用「無之事」¹²⁾と、同年七月二日付で東寺宝菩提院亮恵は勅免のほか着用はなく「田舎衆無分別若着用候欵」¹³⁾と、同月五日付で山

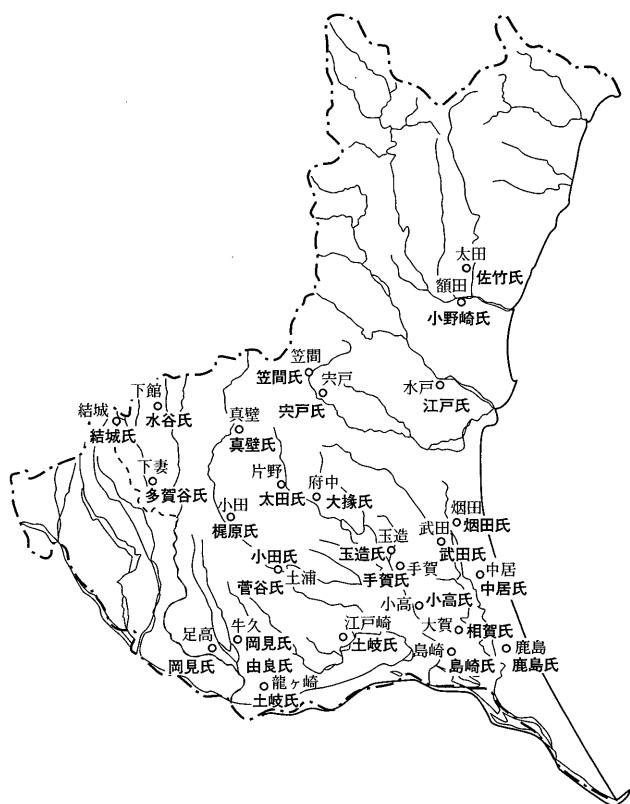


図1 常陸・北下総諸家勢力図 (天正初年)
(『茨城県史 中世編』より)

科言繼は、醍醐寺理性院へ尋ねた所着用「無之事」の返答を得た^①と、それぞれ月蔵坊へ応えている。そして同月十六日付で不動院に充て、

(A) 近年東寺之門人素絹之衣着用之事、法中之威儀不可自他混乱之处、背本寺之法度令犯用他門之衣鉢、依新儀之張行、及諍論之段、無其謂之由為山門訴申趣被聞食訖、所詮堅守旧貫、可致其働旨、遍相触天台門徒、弥可奉祈国家安全之由

(柳原淳光)
左 中 弁在判

天氣候所也、仍狀如件

天文廿四年七月十六日

常州不動院^②

とする後奈良天皇綸旨が発給された。素絹衣は天台宗の衣鉢であり、真言宗では個別勅許以外は着用しないという

のである。江戸崎は霞ヶ浦南岸信太・河内両郡をほぼ領域とする土岐氏の拠点であり、不動院は文明二年（一四七〇）に幸普を開山に創建された土岐氏の氏寺である。天文二十四年は四世幸憲のときであった。

元亀二年五月には河内郡の天台宗逢善寺一五世定珍が『素絹記』を著わし、「不動院裁許之論言他家分絶、云先規云今範、誰仁違於王命、何宗背院宣、濫混自他之威儀、恣著素絹之上表乎」と真言宗に批難を加えている。史料(A)は実現をみていないのであった。逢善寺は談所として関東天台教学の中心的位置にあり、不動院は史料(A)から定珍『素絹記』述作前後の頃逢善寺の役僧を務めていた⁽¹⁶⁾。また領主土岐治英は、天文八年の逢善寺焼失後その造営を行ない⁽¹⁷⁾、永禄元年（一五五八）には当時逢善寺に学んでいた定珍と師檀関係を結び、元亀元年には延暦寺月蔵坊のもと遊学中の定珍を呼び戻して逢善寺一五世としている⁽¹⁸⁾。月蔵坊と逢善寺・不動院とは法流関係にあったと思われる。

ところで、右のような土岐氏と天台宗との関係と不動院の史料(A)の獲得とを結び付けて、相論の背景に天台宗の檀越土岐氏と真言宗を外護する江戸氏を想定し、相論が常陸国の政情と無関係でないとする説がある⁽¹⁹⁾。信太・河内両郡では逢善寺を中心に天台宗が優勢であり、澄恵ら東寺・醍醐寺僧が付法に廻った徴証がない⁽²⁰⁾。また領内真言宗が新儀を行なえば、土岐氏は史料(A)を論拠に権力的にこれを禁じえたはずである。したがってそうした情況のもとこの段階での相論の舞台に土岐氏領内を充ててゐることは適当ではない。天文十八年六月には水戸で、和光院慶岳が天台宗の根本經典法華經の講説をしたために薬王院・大雲寺が天台衆徒を集めて乱入し、江戸忠通が天台宗を諭止する事件があったという⁽²¹⁾。薬王院を中心とする水戸天台宗はこうしたこともあり、領主江戸氏を憚ってかみずから上洛するのではなく、まず土岐氏の庇護のもと揺ぎない地位を保っている逢善寺やその役僧不動院を通じて論旨奏請を図ったことが考えられるのである。次章以降で述べるように、相論は史料上史料(A)をめぐる水戸天台宗と江戸重通との対立で推移していく。むしろ伝統的な天台宗と新興の真言宗との対立の構図を相論の背景に求めることに

異論はないが、相論をたんに宗門間レベルの問題とのみみて、その地理的範囲を江戸氏領を越えた広域相論とすることにも躊躇を覚える。後述のように相論は、宗門間相論のかたちをとりつつも当初から江戸氏が絡んだ江戸氏領内の問題であり、領主権力と結び付いて発展していく真言宗の発展の実態を示すものであった。しかしながら天台宗にとりそれは水戸のみならず「台家」の「理運」に干る問題と認識されたのではなからうか。それに応えた土岐治英が不動院を上洛させるかたちで、宗門間相論として間接的に援助したものと思われるのである。⁽²²⁾ただし土岐氏自身はこの相論に例えば禁制を出すなど直接干与する立場にはなく、これ以上の支援はできない。ここに領主権力の領域支配とそれを越える宗門・教団との編成原理の異質性をみることができる。帰国間もない学僧定珍の『素絹記』述作は、土岐氏による間接支援の一環とも考えられる。しかし、不動院が獲得した史料(A)は、二〇年後の天正三年に至るまで、微弱ながらも水戸真言宗の素絹衣着用に對する桎梏として生き続けたのである。

2、素絹衣着用の意義

真言宗の素絹衣着用が何故に天台宗の抗議をうみ、また真言宗はなぜ素絹衣着用に固執するのであろうか。すでに周知のことであるが、定珍は『素絹記』の冒頭で、素絹衣着服の濫觴は天台貫主良源大僧正(慈慧大師)が村上天皇より「忝披勅許之印文、忝賜素絹之衣服」⁽²³⁾つたもので、総じては「叡峰之美目」、別けては「大師之名譽」であり、「天台宗賜衣之宣旨、自門運啓」としている。また素絹衣は相論の過程の中で「くわんと(宣旨)のきぬのころも」⁽²⁴⁾ともいった。素絹衣は白を本儀とするが、僧位僧官により賜紫・賜赤・賜緋また六位相当の緑を着用することもあった。⁽²⁵⁾後述の醍醐寺戒光院深増に充てた水戸天台宗の抗議文が「官位僧正二有昇進御着用欵」⁽²⁶⁾といっているように、素絹衣着用は僧綱と不可分な関係にもあったのである。

このように素絹衣着用には勅許・僧綱、さらに井筒雅風氏に従えば国家祭祀の性格⁽²⁶⁾があり、天皇權威と不可分な

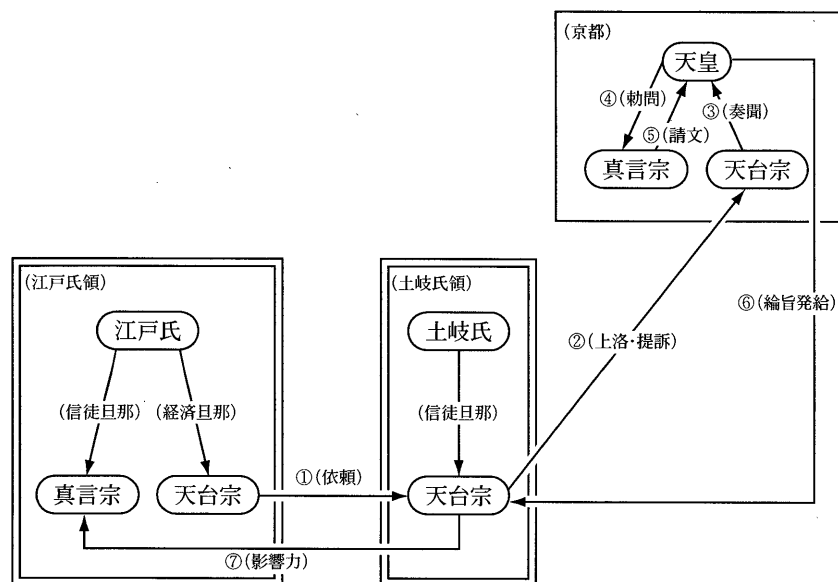


図2 天文24年7月後奈良天皇綸旨発給システム（推定）

関係にあった。したがって真言宗が史料(A)に従わないからといって、例えば永禄六年七月に六地藏寺権律師宥増が権少僧都補任の口宣案⁽²⁷⁾を得ているように、そのことを以て真言宗の天皇権威の否定を論じることとはできない。定珍は、真言宗の素絹衣着用を「欲北嶺之家運、宛如鳥鵲比鸞鳳云々」と批難し、ここに天台宗の優位性を示す。真言宗の素絹衣着用は、天皇権威への求心性を示すとともに、そうした天台宗の優位性の否定にあったといえよう。

3、小括

以上本章では、天文末から元亀初年にかけての土岐氏領信太・河内両郡同氏所縁二か寺の動きを通じて、(1)史料(A)天文二十四年七月綸旨と土岐氏の対応、(2)素絹衣着用の意義を検討した。(1)まず史料(A)について、相論を江戸氏領内の問題とした上で、江戸氏領水戸天台宗が土岐氏を檀越とする関東天台教学の中心逢善寺とその役僧不動院を頼り奏聞に至ったもの(図2)とした。そしてこれに領主権力の領域支配

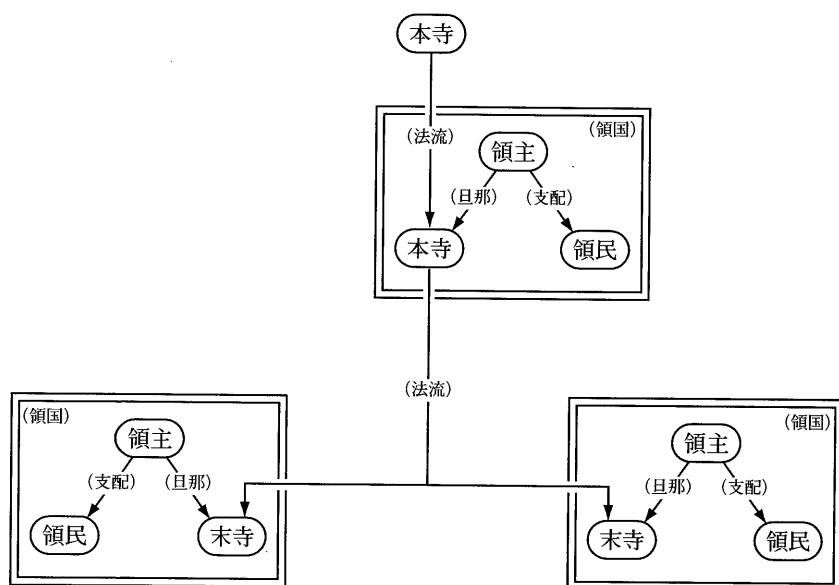


図3 領国支配と宗門・教団編成

と宗門・教団の編成原理の異質性(図3)を求め、逢善寺定珍の『素絹記』述作をその延長線上に位置づけた。次に(2)素絹着用の勅許・僧綱などといった天皇權威と不可分の性格を指摘してここに天台宗の真言宗に対する優位性を求め、真言宗の素絹衣着用を天皇權威への求心性を示すものとし、さらにそうした天台宗の優位性の否定を意図したものと考えた。

二、水戸真言宗と江戸重通

江戸氏は、寛正二年(一四七九)に通房の母慶隆尼が本願となって水戸城外亀田に同氏菩提所として藤福寺を創立した以降、「六地藏寺過去帳」²⁸⁾「和光院過去帳」が江戸氏歴代や一族の法名を記しているように真言宗佐久山方との師檀関係を結んでいく。和光院・藤福寺は六地藏寺末である。前述のように天文十八年(一五四九)六月に和光院が法華経を講説し、ために薬王院ら水戸天台宗が乱入して江戸忠通より論止を受ける事件があった。他方で永禄三年(一五六〇)十二月には薬王院大光柱薄に「大旦那

但馬守忠道⁽³¹⁾「臣枝川兵庫助が奉行を務めている。その忠通も同七年に死去、子通政は病弱のため家督を継ぐことなく同十年に死去したといい、若年の通政子重通が家督を継承し、元龜元年（一五七〇）十一月には元服の祝儀として初めて「重通」を名のって吉田神社などへの太刀の奉納や家中の官途推挙を行なった⁽³²⁾。そしてその四年後の天正二年（一五七四）七月に柳原謀書繪旨の発給と、重通の真言宗への傾斜を示す初見ともされる同三年二月の重通但馬守受領口宣伝達のさいの醍醐寺戒光院深増の素絹衣着用というふたつの事件が起きたのである。本章では(1)謀書繪旨の発給を通じて繪旨の権威性を明らかにし、(2)江戸重通への受領口宣伝達とそのさいにおける醍醐寺僧の素絹衣着用を通じて江戸氏・水戸天台宗・水戸真言宗三者の関係を捉え、相論の本質を明らかにしていきたい。

1、天正二年七月柳原謀書繪旨の発給

天正二年七月になって絹衣相論に関する正親町天皇繪旨が発給された。ところが、これは前権大納言従一位柳原資定の謀書であつたのである。しかしこれまでの研究ではその発給の指摘に留まり、本稿で課題とする視点からの議論は行なわれていない。

柳原家と水戸真言宗との関わりは、まず史料(A)や前述の六地藏寺有増権少僧都補任口宣案の奉者が資定養子淳光であつたことがあげられるが、これはたまたま奉者が淳光となつたことによる偶然にすぎない。ところが元龜二年に和光院慶岳が資定の猶子として参内を果し、上人号を得ている。このことを相論の顛末に絡めて眺めると興味深いとする指摘があるが、謀書作成の人的環境にこれを想定することは妥当と考える。元龜二年といえは逢善寺定珍の『素絹記』述作年でもあり、両者の間に触発することでもあつたのであろうか。

柳原謀書繪旨は伝存していない。関係史料によると充所として江戸重通⁽³⁴⁾と「真言宗」⁽³⁵⁾がわかつている。その趣旨は「和平可然」⁽³⁶⁾といい、「如先規」⁽³⁷⁾とするものであつた。天台宗京都本寺門跡寺院青蓮院はこれを「台家御理運不

能左右⁽³⁸⁾」と理解したが、水戸真言宗は「号御免許、絹衣着用」⁽³⁹⁾し続けたのである。水戸天台宗の中核薬王院は、天正二年の冬には使僧文殊院ら三名を上洛させて青蓮院へ真言宗の素絹衣「恣着用」⁽⁴⁰⁾を訴えた。綸旨を信じていた青蓮院上乘院道順はこの注進に「驚入」⁽⁴¹⁾り、青蓮院はこの年十二月三十日付で薬王院に充て「重而被伺 叡慮候処、曾以勅許之儀無之」⁽⁴²⁾く、歳末ゆえのちに綸旨を奏請するとした。薬王院の訴えは青蓮院を経て朝廷での糺明にかけられ、同三年六月には裁定が下りて「絹衣着用之段者、更無勅候、掠申候条為曲事次第」⁽⁴³⁾となり、天正二年七月綸旨は「日野一位申しやうの文言を、とゝのへくたし候」⁽⁴⁴⁾ものであったとされたのであった。このため資定はこの月に勅勘を蒙っている。⁽⁴⁵⁾

天正三年に比定する五月二十一日付真継久直充宝蔵院有範書状は、

(B)東国天台宗与真言宗就相論、致無事之沙汰、和平可然之旨、^(天正二年)去年七月被成下 綸旨忝存候、然者乍聊尔御樽進上仕候、可然様ニ内々御披露可畏存候旨、内々可被申入候、恐々謹言

五月廿一日

宝蔵院
有範（花押影）

真継^{久直}
兵庫助⁽⁴⁶⁾

としている。宝蔵院は茨城郡内に所在する同名真言宗寺院⁽⁴⁷⁾のうちのひとつと思われる。諸国鑄物師公事役真継久直は柳原家の内人⁽⁴⁸⁾で、日付は資定勅勘の前月である。したがって史料(B)は謀書綸旨発給に対する水戸真言宗の柳原資定への礼状である。すでに史料(A)で真言宗の素絹衣着用は否定されている。謀書が資定の一存か水戸真言宗の画策によるものかは明らかにしえないが、水戸真言宗が資定に対して自宗に正当性を付与する綸旨を求めたことは確かといえよう。⁽⁴⁹⁾そして史料(B)が出された背景には、謀書綸旨が謀書とされるまでの間、この謀書綸旨が真言宗の素絹衣着用を正当化する論拠として強力に機能したことが考えられるのである。

では、素絹衣着用を続ける水戸真言宗はなぜここに至って自宗を正当化する綸旨の獲得を図ったのであろうか。

それは謀書繪旨を以て史料(A)を無効とするためといわざるをえない。定珍が『素網記』で真言宗に対して史料(A)を顧みないものと批難し、謀書繪旨を破棄する後述の天正三年八月正親町天皇繪旨(史料(D))が同時に史料(A)の破棄をも宣していることからみて、水戸天台宗は依然史料(A)を掲げて真言宗の素絹衣着用を批難し続けていたと考えられるのである。江戸重通がこれに異論を挟む正当性はなく、このためまず真言宗の素絹衣着用を正当化し、さらに重通にその権力的保障を委任するものとして謀書繪旨が企図されたのである。したがって、天台宗が重通に抗議したところで、重通はこの謀書繪旨を論拠に天台・真言両宗「和平可然」とするのみでこれを退けたに違いない。却って天台宗の抗議を違勅と断じたともいえよう。水戸真言宗にとり繪旨(史料(A))の権威に対抗するにはたとい謀書を以てでも新たな繪旨の権威の獲得によるほかなかったのである。

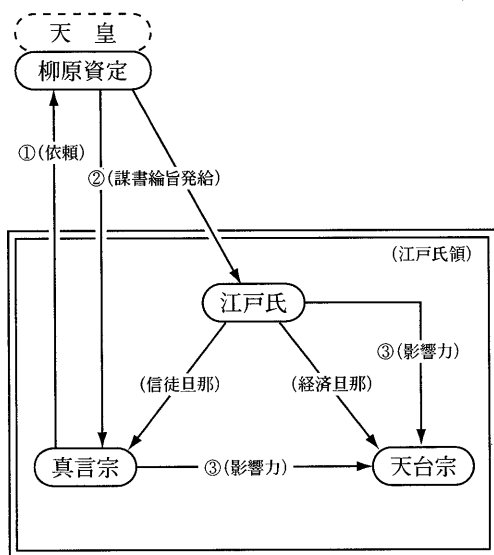


図4 天正2年7月柳原謀書繪旨発給システム

2、醍醐寺戒光院深増の下向と江戸重通の受領補任
 天正三年二月、真言宗の中核山城国醍醐寺の戒光院深増が水戸へ下向し、勅使として重通へ但馬守受領口宣を伝えた。ところがこのさい深増が伴僧とともに素絹衣着用したため、相論の局面は大きく動くことと

なつたのである。まず水戸天台宗の深増への抗議文をみておこう。

(C)態啓達、抑今般就被成下受領之 口宣、為勅使御下着大儀之至、御神妙之由、屋裏の方々各被申事二候、雖然

馬頭院被預候 口宣・被奪取候而且那へ之直奏者、頗本意之外欵と存事二候、既御所持二候三条之西殿之御符

雇戒光院、路次之間計可被所持、於国者從雜掌之手江戸へ可相渡と候上、御慮外者無紛事二候、殊且那遂面上

・時分、御主伴・絹衣着服之由、為以後雖听^訴及候、且者応 勅宣之綸命、且者重受領之祝儀、不及其沙汰事二

候、但官位僧正二有昇進御着用欵、是又無得意次第二候、既御宗旨之為本寺、從御室仁和寺之禁中同座主・御

返礼二出世修學者、何^{（一）}着布衣候、自然成僧正候而も、香之袈裟計者免許候、於絹衣者言語道断・儀二候、御

文言明鏡二候処、被任本寺之制法事者、都鄙之分別、花夷之差際欵、諒二大□在之御振舞傍若無人之至候、畢

竟於無列次之夷中者、互有猶予時宜之落着全不可有尽期之間、不顧深雪寒吹、旧冬以僧都京都へ令言上候、此

一到来之間者有御在留、被任御勅裁之次第被決雌雄是非、御理運之上二帰洛單所仰候、若^於無御承引者、今度

之興行皆以可為私曲候、恐々謹言

仲陽六日

(30)

戒光院御伴僧

台家之諸寺

史料(C)はまず「馬頭院被預候 口宣於中途被奪取候而且那へ之直奏者、頗本意之外」としている。馬頭院は藥王院と青蓮院との間の使僧である。「旦那」とは重通を指す。重通への口宣案は本来馬頭院が京都にて預り、藥王院から重通へ渡されるべきものであったのである。深増はその口宣案を馬頭院より奪い取り、「於国（ここでは江戸氏領）者從雜掌之手江戸へ可相渡」ものを「主使」深増みずからが「直奏」し、その重通との対面のさいに伴僧とともに素絹衣を着用したのである。史料(C)は「官位僧正二有昇進御着用欵」といいつつも、「勅宣之綸命」「受領之祝儀」として深増の行為を容認している。重通への遠慮もあろうけれども、口宣案そのものは正規のものであり、

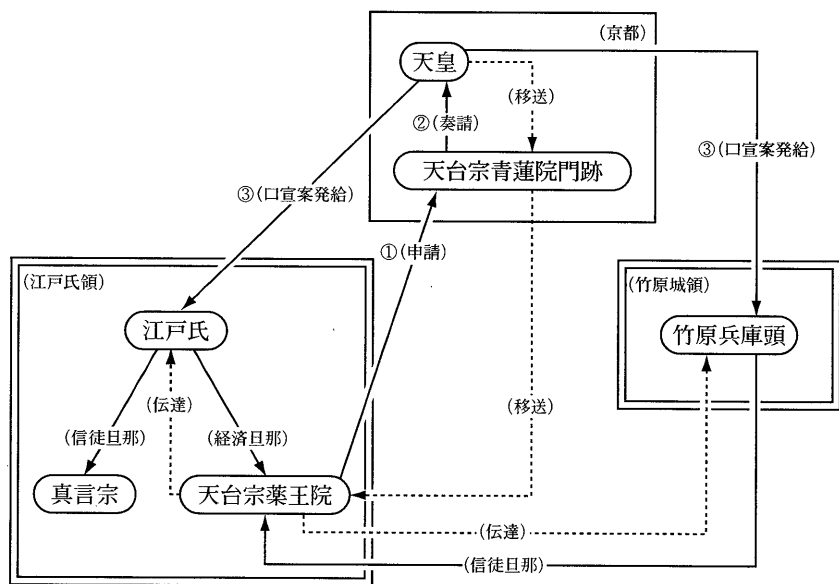


図5 江戸氏・竹原兵庫頭受領口宣案発給・移送・伝達システム

深増へはさきに謀書繪旨の真偽を糺すために上落した文殊院らの帰国と勅裁を待つよう在留を求めるに止まった。

深増の行為は、これまでの研究では素絹衣着用ばかりが注目されている。確かに「殊」以降では深増の素絹衣着用の不当を説くことに終始しているから、抗議のウエイトもそれに置かれていたといえなくもない。しかし史料(C)がまず問題としていることは、従来薬王院が行なってきた受領口宣の伝達を深増が行なったことである。江戸氏家督は歴代但馬守を名のっているが、それは自称ではなく、少なくとも応永(一三九四〜一四二八)末の江戸氏水戸入城後のある時点からは薬王院を通じた正規の口宣伝達によるものと思われるのである。史料(C)は深増に対して在留を「於無御承引者、今度之興行皆以可為私曲候」としている。「今度之興行」とはむろん深増による重通への口宣伝達を指し、この文言はそうした江戸氏に対する薬王院の位置を示すものなのである。前述のように薬王院は天正二年の冬に文殊院らを

上洛させ、青蓮院へ水戸真言宗の素絹衣「恣着用」を訴えているが、そのさいこれとは別に竹原兵庫頭の受領奏請を要請したとみられ、青蓮院上乘院道順より「兼又竹原兵庫頭天台之儀偏馳走之之由、使僧文殊院両三人委物語候間、則受領之儀申調、口宣相下候⁵³」との返答を得ている。茨城郡吉田神社神宮寺薬王院は、平安初期の草創以降別当職など常陸大掾氏やその一族と密接な関係をもち、応永二十九年に馬場大掾氏が江戸氏により水戸を追われて府中に拠つたのちは江戸氏の庇護を受けることとなつた。だが竹原兵庫頭を府中の大掾慶幹子で同貞国弟の茨城郡竹原城主竹原義国ないしはその子とすると、彼の薬王院への馳走はその大掾氏との由緒に従つたものであり、彼の受領補任もまたその由緒のもと薬王院から青蓮院の奏請を以て行なわれるということになる。とするならば、薬王院は、江戸氏領下にあつて江戸氏の庇護を受けつつも、受領補任という点では江戸氏とも大掾氏とも相対化した位置に立ち、⁵⁴彼らへの受領補任口宣案は薬王院を通じて青蓮院の奏請を以て下されるという図式(図5)が成り立つのである。薬王院は、寺伝に大同二年(八〇七)最澄の開創とし、また桓武天皇の勅願による延暦年間(七八二〜八〇六)の草創とも伝え、別当鎮舜のとき天文十七年二月に青蓮院門跡尊鎮法親王より「桓武帝勅願所」の額を賜わっている⁵⁵。この額は青蓮院へ申請した上で下賜されたものであろうから、鎮舜は、「桓武帝勅願所」という由緒を京都本寺で当代後奈良天皇同母弟でもある青蓮院門跡尊鎮法親王の筆を戴くことによつて強調しようとしたのであろう。薬王院はそれ自体が天皇權威を体现する存在なのである。

薬王院と領主権力との関係を受領補任を通じて右のようにみると、ともに江戸氏領下にあつて江戸氏を旦那とする六地藏寺・和光院・藤福寺などの真言宗と薬王院を中核とする天台宗とは、江戸氏との関係において異なつた立場にあつたものと考えられるのである。前者を象徴するものが江戸氏歴代・一族の名を記す過去帳である。それは、水戸真言宗が私的な菩提所の性格を示す。後者を象徴するものが受領口宣伝達である。それは、水戸天台宗が江戸氏に相対化して伝統的で公的な儀礼的權威、即ち天皇を源泉とする統一權威・權威秩序を誇示するとともに、江戸

氏へのその付与の独占を示すものである。ひとくちに旦那（檀越）といっても、真言宗とは信仰上の師檀關係を結んだいわば信徒旦那であるが、天台宗へは領主としての文字どおりの經濟上の援助、いわば經濟旦那にすぎない。しかし、江戸氏家督への受領口宣伝達は天台宗の行なうところであり、真言宗はそうした儀礼上の立場にはなかった。但馬守受領口宣の伝達を受けることにより、重通は家督としての威儀を完全に整えることになる。この点で水戸天台宗は、同真言宗に対して決定的に優位に立っていたのである。したがって深増の新儀を重ねた「今度之興行」は、そうした藥王院・水戸天台宗のもつ優位性の否定であり、水戸真言宗がこれに替わることを京都本寺醍醐寺僧が宣言したパフォーマンスなのである。私は、絹衣相論の本質はこの点に求められると考えている。

深増による重通への受領口宣伝達を右のようにみると、これもさきの柳原謀書繪旨と同じく水戸天台宗より仕掛けられたものといえる。「雇戒光院」った主体は重通と水戸真言宗なのである。深増は後述のようにこの年の九月に再度水戸に下向し、藤福寺に滞在している。この二月の下向時も藤福寺に滞在したとみてよく、さらにこの下向そのものも重通庇護のもとに行なわれたと考えられるのである。深増は史料(C)を「不依存御札」と断じ、「就真言・天台衣鉢之儀、去年於京都被及御沙汰、江戸但馬守殿へ被成下（重通）繪旨候間、於様躰者但州可為御分別儀候」と反論した⁽⁵⁶⁾。この文言は彼の素絹衣着用が謀書繪旨を根拠としたものであり、さらに「今度之興行」が重通と水戸真言宗の仕掛けたものであることを示唆している。そして謀書繪旨が破棄されていないこの段階での深増の反論は正当性をもつ。水戸天台宗が拠とする史料(C)と儀礼的權威・天皇權威は、謀書繪旨の出現と「今度之興行」により否定されたのであった。

3、小括

以上本章では、(1)天正二年七月柳原謀書繪旨と(2)同三年二月の江戸重通但馬守受領口宣伝達における醍醐寺戒光

院深増の素絹衣着用を検討した。(1)柳原謀書繪旨は史料(A)天文二十四年七月繪旨を掲げる水戸天台宗に対抗する水戸真言宗の意に沿ったものであることを明らかにし、繪旨の權威には繪旨の權威でしか対抗しえないとした。江戸氏の一存では史料(A)は破棄とはならないのである。(2)水戸天台宗の中核薬王院による領主の受領補任口宣の奏請を明らかにし、ここに領主權力に相対化した薬王院・水戸天台宗の天皇に源泉する統一權威・權威秩序とそれに基づく水戸真言宗に対する優位性を求め、深増の素絹衣着用による重通への受領補任口宣伝達の本質が、そうした水戸天台宗の權威と優位性を否定して水戸真言宗がこれに替わることにあることを明らかにした。さらにその行為に正当性を付与するものとして謀書繪旨を据えた。

相論がここに至って右の事態になっていったのは、おそらく家督も継げなかった病弱の父を失った若年家督重通の擁立と無縁ではなからう。水戸真言宗は江戸氏との信仰上の師檀關係にある。しかし水戸天台宗は受領補任口宣伝達など公的な儀礼の場では決定的に水戸真言宗に優位に立っていた。重通の家督繼承まではかろうじてそうした秩序が維持されてきたものではなからうか。江戸氏の日常の信仰心を掌握してきた水戸真言宗は、これを期に重通の心中深くにさらに入り込んで彼を動かし、水戸天台宗のこれまでの位置や權威までも奪い取ろうとしたのである。ここに領主權力と結び付いて発展していく真言宗の発展の実態が窺われる。

三、「京都之儀」と織田信長

前章では、天正二年(一五七四)七月柳原謀書繪旨の発給と同三年二月の江戸重通受領補任口宣伝達における醍醐寺戒光院深増の素絹衣着用を検討した。これらは重通と結んだ水戸真言宗側が仕掛けたものであり、繪旨の權威にはやはり繪旨の權威でしか対抗しえないことと、相論の本質が水戸真言宗による水戸天台宗のもつ儀礼的權威・天皇權威の篡奪にあることを明らかにした。これらはいずれも薬王院により青蓮院門跡を通じて奏聞されることに

なる。ところがこの頃京都では、織田信長が伝奏五人を定めて彼らを通じて朝廷政治に干与しはじめた。絹衣相論も例外ではなく、はからずも信長の影響下に展開することとなったのである。本章では(1)伝奏連署の添状をもつ天正三年八月正親町天皇綸旨と(2)通説に相論を結着させたといわれる同四年六月正親町天皇綸旨と同年九月織田信長朱印状を検討し、常陸国江戸氏領下水戸で起きた相論が、信長を軸とする京都の政情に左右されていく姿をみていきたい。さらに(3)その後の相論の動きにも触れておきたい。

1、天正三年八月綸旨と織田信長

天正三年六月、柳原資定は綸旨謀書の科で勅勘を蒙った。(同年)七月三日付青蓮院門跡尊朝法親王令旨は薬王院に充て「去年七月彼真言宗申出 綸旨者、奏聞相違之子細候、絹衣着用之段者、更無勅許候、掠申条為曲事次第之由、既被及御沙汰候、弃破之可被成下 綸旨候」とし、さらに青蓮院は千妙寺と薬王院にそれぞれ同月二十一日付で資定の勅勘を伝えている。ところが、資定はすでに同月十四日付で勅免となっていた。これまでとくに論及されるには至っていないが、この勅免には織田信長の影響があったものと考えられるのである。右の尊朝法親王令旨は続いて「然処信長為御公事法度被相定奉行五人候間、重而可披歴之旨候」としている。

天正三年八月四日、朝廷では「五人しゆ御かたの御所までまいりて、てんたい・しんこんのくしの事につきて、りんしのあんとも色々さた」を行ない、同日付で次の正親町天皇綸旨と添状が発給された。

(D)天台・真言衣鉢相論事、及確執之由太々不可然、既延曆・弘仁之永 宣旨歴然之条、於両宗門末寺之制法者聖断依可有猶予、不拘理非始於先朝天文廿四年之 綸旨、至去年之 勅裁皆悉被毀破訖、所詮諸末寺如先規各々為本寺之沙汰可進止之、若本寺之成敗猶有未断之議者可被加 勅命者也、然上者顯密互加優如、各闍諍論、可令専天下鎮護之旨、対関東中両宗門可相触之者、

天氣如此、悉々之、以狀

天正三年八月四日

右中將判

江戸但馬守館^(重通)

(E) 顯密諍論事、寛有之繪旨如此候、両宗門末寺之衣鉢向後各猥之儀無之様、被相触関東中、令和平者、可為国家之忠功之由被仰出候也、謹言

八月四日

江戸但馬守殿⁽³³⁾

史料(D)(E)の程なく出されたと考える青蓮院充誠仁親王書状は、返事として、

(F) 文のやうくハしくみまいらせ候、天台・真言きぬの衣相論の事、落著のやう聞まいらせたきよし、うけ給候、

去年七月の繪旨ハ、きぬの衣御めんにてハ候はぬを、日野一位申しやうの文言を、とゝのへくたし候につきて、

勅かん候所に、信長より五人の伝奏をさため、諸事申入候、此事も天文廿四年より、こそこの繪旨までことゝ

く棄破候て、今より本寺くの法度を、まほるへきよし、又此分に五人としてひはん候事にて候、本寺をさし

をき、すくに申候ゆへ、かやうにみたりかはしく候まゝ、今よりは、本寺くより諸事申入候へきよしさため

られ候、又日野一位勅めんの事ハ、たとへ御いきとをりふかく候とも、此度ハいかやうにもめしいたされ候や

經元^(甘露寺)
重保^(庭田)
晴右^(勤修寺)
孝親^(中山)
実枝^(三条西)

うにと、ことをわけて、五人の伝奏御わひ事を申候ほとに、勅めん候事にて候、この外うけ給候ハす候、猶
けさんの時、申うけ給候へく候、かしく^(見参)

としている。「五人の伝奏」とともに史料(D)の文言を議論した誠仁親王は、青蓮院がその経緯を尋ねてきたので史料(F)を認めたのである。これによると、資定勅勘ののち信長が諸事申入れのため伝奏五人を定めたので、相論の批判も彼らに委ねられることになり、彼らは史料(A)と謀書繪旨を破棄した上で相論を「みたりかはしきもの」と断じ、末寺は本寺の法度に従うべきものとした。また資定勅免については青蓮院の憤りに理解を示しつつも、これは彼らの強い要請に基づくものであったというのである。先行繪旨の破棄と資定の勅免は相論をふり出しに戻すものであり、優如・寛宥を説く史料(D)(E)は重通をして「兩宗御文点兩様三拝読」できるものであった。右の裁定は、相論の解決に理非を明確にした遺恨を残すような決着を回避し、事を穏便に済まそうとする政治決着といえよう。しかしそれでは真言宗本寺が素絹衣着用を可とする余地もあり、水戸天台宗の了承するところではなかった。

ところで、信長が「為御公事法度被相定奉行五人」「五人しゆ」「五人の伝奏」の初見はさきの(天正三年)七月三日付尊朝法親王令旨である。メンバーは史料(E)の差出であり、その成立はこの日をさほど遡るものではなからう。令旨は後半のこの部分に重きがおかれていたかもしれない。水戸天台宗にすれば自宗の正当性を確認する繪旨の発給を求めているのであり、もとより信長の裁定までは念頭になかったに違いない。天正三年七月十三日、信長は禁裏東南に公家衆の第の造成を申し入れて勅許を得た。『御湯殿の上の日記』は同日条に「かの五人しゆ、せつけ^(公衆衆)・せい^(公衆衆)くわ・そのほかみなくけしゆこの御所のひかしみなみ所にいゑく^(公衆衆)たてさせ申すよし、のふなか申入候、しかるへきよしおほせいたさるゝ」と記している。また信長は泉涌寺修造の勅命を受け、(同年)十二月十五日付で「就泉涌寺造営之儀、叡慮之趣重而示給候 即申付候」と修造の実行段階にあることと、その旨「宜令奏達給」うよう求めた「五人の伝奏」のうち三条西実枝を除く四人を充所とする黒印状を出している。泉涌寺修造もともと

彼らを通じた信長の申し入れによるものであったのであろう。信長の意向を反映する「五人の伝奏」が「公事」に干与するようになって、相論の局面は京都にてさらに動くこととなったのである。

では、なぜ信長は相論を「みたりかはしきもの」とし、ひとりの処罰もなく事を穏便に済まそうとしたのであろうか。それは信長の対朝廷政策と権力の有り方に密接に関係している。信長は、天正二年三月に従三位参議叙任、同三年十一月に権大納言と右大将に任官、同四年十一月に正三位内大臣、同五年十一月に従二位右大臣叙任、同六年正月に正四位叙位、同年四月に右大臣・右大将を辞すが、位階は同年六月の本能寺の変に死すまで保持した。また信長は、將軍足利義昭の政治利用やのちの石山戦争における本願寺との勅命講和に表われるように、自身の武力を基盤としつつ、既成の天皇を源泉とする統一権威・権威秩序に内在して畿内近国における権力を掌握していたといえる。この天正三年には、正月に洛中洛外の寺社本所領の雑掌にその押領を禁じ、三月には諸門跡・公家衆に徳政を施行し、醍醐寺ではかの深増が「惣寺忝存候」と喜んでいる。十一月には公家衆や青蓮院・仁和寺ほか諸寺社、さらには禁裏料所や誠仁親王料所に新地を給与するなど、天皇家や公家衆・寺社の経済基盤の安定を図った。とくに新地給与は、彼らの旧領を蝨所として獲得し、由緒に基づく返還ではなくして再編し配分したものであった。信長は彼らの儀礼秩序を崩すことなくこれを丸抱えにして権力を掌握する位置に立ったのである。またこの年の四月信長は、三好康長および本願寺攻撃につき青蓮院門跡尊朝法親王と仁和寺御室任助法親王より巻数を送られ、「近日開陣仕、可得賢意候」と礼状を認めている。信長の戦闘は、天台・真言両聖道門の宮門跡の戦勝祈願を得た国家的正当性を帯びた行為であったといえよう。信長はこうした政情の中、常陸国水戸で起きた絹衣相論がいたずらに朝廷を混乱させ、天台・真言両宗が対立を深めるような事態を回避したものと見えよう。相論は綸旨の体裁をとりながらも、全くの信長の都合の中で処理されようとしていたのである。

2、天正四年六月繪旨並びに信長朱印状と深増の処罰

天正四年三月、醍醐寺三宝院義演は、「関東真言宗絹衣著用」につき勅問を受け、次の請文を提出した。

(G) 関東真言宗絹衣著用之事、被尋下候、従先規、平民於本寺無其儀候、況末寺者可著事、言語道断次第候、雖然為勅命、戒光院廻愚才由、執沙汰候間、内々可得 叡聞所存候処、幸被仰出候条、有様言上之由、宜令奏達給候、穴賢々々

三月廿五日

義演⁽⁷⁶⁾

史料(G)によれば、水戸真言宗の素絹衣着用以上に、水戸での深増の行為が勅問として問題視されたのである。青蓮院は四月に入つてこの文面を葉王院へ伝えた。

ところで、深増は天正三年二月の下向ののち、おそくとも同年四月には醍醐寺（上醍醐）に戻っている。深増は、上醍醐年預俊典との連署により同年同月二十四日、下醍醐三宝院へ信長三月徳政への惣寺の喜びを伝え、また「御殿御用木」の進上を約束するなど寺務を執行している。さらに「于時天正三⁽⁷⁷⁾乙亥⁽⁷⁸⁾菊月廿六日、上醍醐寺戒光院深増法印、依絹衣評論調繪旨被成下向」れ藤福寺へ在留した。史料(D)とはひと月半程離れており、この「繪旨」が史料(D)かは留保したい。したがって深増は、江戸重通受領補任口宣伝達後もこの件で何らの処罰を受けることなく醍醐寺僧としての活動を続けていたのである。義演は史料(G)で深増の水戸での行為を個人的な「戒光院廻愚才」したものとしたが、仮にそうであつたとしても、「内々可得 叡聞所存候処、幸被仰出候」という弁明の言からみて、醍醐寺ではこれを周知ながら問題視していなかつたといえよう。むろん朝廷、信長も青蓮院を通じてこれを知らされていたはずである。深増の行為が不問に付されていたのは、前節でみた信長の相論処理に対する方針によつたものであろう。

ところが、なぜここに至つて深増の行為が問題となつたのであろうか。それは、水戸天台宗の強硬な抗議を受け

た青蓮院が納得のいく決着を図るよう求めたからであった。青蓮院侍林垣玄通は四月五日付で薬王院に充てて「今度両宗被仰鎮ニ付而、彼本寺江從 禁裏様被成御尋候処ニ、三宝院殿より有様之御返事被成候、(略) 此度之儀種々致馳走申事候、」としている。史料(D)の再論である。

ところで、史料(D)の再論が可決したことからも明らかのように、裁許綸旨は必ずしも絶対性を属性とはしておらず、再論が許され、不都合が確認されたならばその綸旨は破棄されて新綸旨が発給される余地を残す。綸旨の權威が天皇權威に由来することは勿論だが、とはいえこれが遵守されないからといって直ちに天皇權威の失墜を論じることが拙速に思ふ。

さて、史料(G)を知らされた江戸重通は、四月十九日付で「去年自根来寺以連判御室御所へ被申入奉書之筋目、真言宗絹衣之段古今無其隠之趣、雖為遠国不可有之違乱御文言」⁽⁸¹⁾を進上するので綸旨(史料(D)か)の趣旨を分明にされたいと信長「伝奏御奉行衆」に申状を認めた。薬王院尊仁は四月二十三日付で、史料(D)は天台着服真言不可の先規に従い本寺の沙汰に従うべきものと重通へ抗議する。だがこうした論争を重ねる常陸国水戸での相論当事者には、相論の行方が両宗いずれが是か非かではなく、全くの信長をめぐる畿内の政情に左右されていたことまでは知るには至らなかつたといえよう。

史料(G)を受けて天正四年六月二十八日付で次の正親町天皇綸旨が発給された。

(H)今度於関東、深増法印著絹衣之由、有其聞、為事実者、背法度之儀、曲事之次第也、此段両宗相論之条、可任本寺之制符之由、去年既被成 綸旨訖、弥可存其旨之由、可有御下知之旨、可申入三宝院僧都給之由⁽⁸²⁾

天氣所候也、仍執達如件

天正四年六月廿八日

右大弁光宣⁽⁸³⁾奉

(二) 生院義通⁽⁸⁴⁾
大納言僧都御坊

史料(田)ではもはや「関東真言宗素絹衣着用」は問題とならず、深増の素絹衣着用のみを曲事と断じ、末寺は本寺の制符に従うべきとしてその旨醍醐寺三宝院義演に伝えたのである。『御湯殿の上の日記』は同日条に「くわんと(音通)のきぬのころものことに、三ほうゐんのりんし(音通)右中將にかゝせらるゝ」と記し、翌二十九日条には「三ほうゐんゑのりんしまいらせらるる」とある。その後青蓮院は、関東真言宗が新儀を行なう場合には勅命を得るよう三寶院が本寺として彼らへ伝えるべきことを奏請し、七月二十九日付でその旨の綸旨が三寶院へ発給された。⁽⁸⁵⁾ 義演は同日付で重通に充て末寺に至るまでの素絹衣着用はなく「新儀之段堅可為停止候」とし、醍醐寺理性院堯助は右添状として重通へ、「背寺法而深増法印任愚私、忝之所行先代未聞之事候、就其被当門跡へ被成 綸命候」とした上で「弥無猥之儀様、諸寺江急度可被申渡」とした。⁽⁸⁷⁾ また同月二十九日付正親町天皇女房奉書は「文のやうくわしくひろう申て候へハ、りんしををなされ候まゝ、これをえとさつしやう兩人に、ミせられ候て、まつ寺へも仰くたされ候へのよし」(「青蓮院中」御ちこ)⁽⁸⁸⁾ に伝えている。綸旨は三寶院充のものとはいえ、その内容は公開性のあるもので青蓮院にも知らされたのである。さらに『歴名土代』によると、重通はこの年八月四日付で従五位下但馬守に叙任されている。これに従えば、前年二月の但馬守補任はいったん破棄され改めて補任しなおされたのであろうか。

青蓮院は史料(田)を受けて京都所司代村井貞勝を通じて信長朱印状の発給を求め、信長右筆大響正虎(式部卿法印楠長諱)は八月二十五日付で貞勝に充て、「天台宗申事ニ付而綸旨拝領候間、御朱印申請度之由候間、令披露候処、可被遣之」こととなったことを告げた。⁽⁸⁹⁾ 青蓮院は、信長を中心に動く畿内の政情の中で、史料(田)に信長朱印状を添えることで史料(田)実現の保障を確保しようとしたのであった。そして、九月二日付で三寶院に充て次の信長朱印状が発給された。

(1) 就常陸国天台・真言両宗絹衣相論之儀、去年対江戸但馬守、任本寺之法度同先規之旨、可致其沙汰之由、被成下 綸旨之處、戒光院深増掠 勅裁、背寺法、諸末寺之族絹衣令免許之条、言語道断之次第也、真言宗於制符

者、仁和寺并当院被対申、禁裏御一行歴然之上、重而青蓮院宮より当院江被成 綸命之条、弥可為本寺之下知、至彼惡僧者、可処罪科候也、恐々謹言

九月二日

信長⁹⁰

史料(I)は、真言宗に肩入れする重通や素絹衣着用を強行する水戸真言宗を批難するのではなく、史料(II)を受けて「諸末寺之族絹衣令免許」めた「惡僧」深増ただひとり処罰するとしたのである。さらに続けて三宝院に対して史料(II)の遵守を促すよう青蓮院より申し入れがあったことを加えた。

深増への処罰は信長政権の管理下のもと醍醐寺大衆の名において行なわれた。奥書に村井貞勝揮下村井又兵衛吉忠・村井将監光清の連署をもつ天正四年九月七日付醍醐寺大衆等起請文は、その前書で、

(J) 一、戒光院曲事子細在之付、離山被申上者、向後音信不通并見合ニ生害可申付事、

一、彼坊荷物・諸道具・俵物以下、少も預不申候、勿論今度住持被取退候以後、少茂乱妨不仕事、

一、若山上山下ニ陰置者在之者、訴人次第三可被加成敗候、前書如件

とし、深増を「離山」に処している。

時期は不詳だがこの年前住尊忠僧上補任を含めて上洛⁹²していた薬王院尊仁は、九月十八日付の重通充の青蓮院門跡尊朝法親王書状と添状の上乗院道順書状、同じく三宝院義演書状と添状の理性院堯助書状を預る。いずれも深増が繪旨に背いたので信長の処罰を受けたとしている。これらの書状は尊仁の依頼に応じてのものと考えられる。⁹³また道順は同日付で水戸天台宗「江戸十箇寺」充てに同趣旨の書状を認め、尊忠には「両宗相論之事弥属本意珍重候⁹⁴」とした。青蓮院坊官鳥居小路経孝も同日付で尊忠に充て「如御存分、御理運満足推量仕候⁹⁵」としているが、さらに経孝は「隨分廻愚才御本意ニ申達候、諸寺被仰談、勅裁御礼以下急度被仰⁹⁶無御油断可被入御精事尤候⁹⁷」としている。青蓮院内で相論につき実質的に動いていたのはこの鳥居小路経孝であった。相論は、深増をスケープゴートと

することにより、信長の望み通りに京都での天台・真言両宗の対立を未然に回避した上で、かつ水戸天台宗の内得いくかたちでの裁決をみたのであった。全くの想像の域にあるが、私は、経孝が「廻愚才」し、深増の処罰で相論をおさめる案を提示して尊仁を内得させ、信長の内諾を得て真言宗への根回を経た上で、まず義演への勅問と史料(G)として現れ、さらに史料(H)(I)に至ったのではないかと考える。天正五年三月、尊仁ら水戸天台宗は「一儀落着」として関係案文を日光山衆徒中へ届けた。そのさい「幕下信長殿之朱印、以千万之氣遣、申請候」と認めた。⁽⁹⁸⁾京都において信長の強大な権力を目の当りにした尊仁の実感がここに集約されている。

3、「京都之儀」と江戸重通

相論は今枝氏を除いて史料(I)を以て決着したとされ、それが通説化している。

ところで、次の薬王院充鳥居小路経孝書状は今枝氏も含めてこれまで天正四年に比定されてきた。

(K)御状拝見申候、仍彼儀江戸殿就未裁断、真言宗絹衣着用之由不審存候、於事实者、被着絹衣子細、^(江戸重通)江但御一札

を被取候て、早々秋中可被差上候、以其上被遂 奏聞、重而 綸旨被申出、可被遣之由候、去年十一月十四日

候哉、從仁和寺門跡、三条殿を以、信長へ戒光院御成敗之儀不相届候由被仰掠ニ付而、瀧川伊予守・羽柴筑前^(一基)

・宮内卿法印、彼三人為御使当門跡江尋被申候処、我等罷出、悉申分、即治部卿・拙者兩人を内符御広間迄御^(松井重信)

使者被召具、丑刻迄種々御尋共候つるを申理、取前以 綸旨并朱印之通御理運相究候、京都之儀弥堅固ニ候処、

於田舎窓所行、沙汰之限候、早々江但一紙被仰請、早々使僧を御上肝要候、委曲馬頭院へ申渡候、恐々謹言

^(天正五年)
七月九日

^(鳥居小路)
経孝（花押影）

⁽⁹⁹⁾
薬王院 御返報

「綸旨并朱印」は史料(H)(I)を指し、「内符」^(府)は内大臣織田信長を指す。信長の内大臣在任期間は天正四年十一月二

十一日から同五年十一月二十日までであり、したがって史料(K)は天正五年のものとなる。江戸重通は史料(H)(I)および両宗本寺の書状を受けたのちもそれに従わず、水戸真言宗の素絹衣着用は続いたのである。史料(K)はそのことを青蓮院へ訴えた薬王院への返書である。史料(K)によると、京都では天正四年十一月十四日頃に仁和寺御室任助法親王が「五人の伝奏」のひとり三条西実枝を通じて離山となった深増の復権を信長に訴えたため、信長臣瀧川一益・羽柴秀吉・松井有閑の三人が門跡尊朝へ相談を求め、青蓮院は経孝らを信長のもとに遣わして史料(H)(I)を再確認している。仁和寺御室は真言宗において、中世前期には法親王がこれに就く「皇統の門流」として制度外権威として位置づけられ、その支配は中世後期に至る。⁽¹⁰⁾

今枝氏によると、相論は江戸氏を滅ぼして水戸を領した真言宗寄りの佐竹氏国替まで続く。今枝氏は、信長段階において本願寺や一向一揆などとの交戦と関東が勢力外である点をあげて信長の関心のうすさを指摘する。⁽¹⁰⁾ 信長が相論に無関心であったことは間違ひなからう。だが、信長は決して関東に無関心であったのではない。信長は、天正三年十一月二十八日付で甲信の武田勝頼挾撃のため常陸国北部の佐竹義重に朱印状を送り、同四年六月八日に「さたけひたちのすけ」を奏請する。これは同月二十七日に「さたけひたちのすけ御せんの事、からす丸右中弁に仰せらるゝ、御とく日にてかきをさるゝ、日つけ十日の分也」として義重の従五位下常陸介叙任が決定している。⁽¹⁰⁾

信長は、臣下でない義重に対して明らかに統一権威を背景にした上級権威として臨みつつ、その与同を期待したのである。重通の同年八月の叙任にこれと同様の意図をみる向きもある。信長は権威秩序の上では江戸氏の上位にあるものの江戸氏領は信長の勢(権)力圏の外にあり、したがって信長の権力は京都をおさえ官位も流浪の將軍足利義昭を越えてはいるものの、統一権力ではなく、地方権力にすぎない。史料(H)の発給は常陸国天台宗に大きな喜びを以て迎えられた。しかし史料(I)を顧みる者は上洛して事にあたった尊仁にすぎない。⁽¹⁰⁾ 深増処罰後の重通充の両宗本寺の書状や史料(K)に窺われるように、江戸氏領内での「京都之儀」史料(H)(I)の実現は江戸氏に委ねるほかなかった

のである。

4、小括

以上本章では、朝廷での裁定にもち込まれた相論の行方について、(1)史料(G)天正三年八月繪旨、(2)史料(H)同四年六月繪旨と史料(I)同年九月信長朱印状、さらに(3)その後の相論の動きについて検討した。(1)相論は、この頃伝奏を定めて朝廷政治に干与し始めた信長の影響下におかれた。この年信長は、徳政・新地給与など禁裏・公家・寺社の経済安定を図るなどその儀礼秩序を崩すことなく権力を掌握していった。その最中で信長は、常陸国水戸でおきた絹衣相論、いわば外的要因による京都での天台・真言両宗の対立を回避するため穏便な政治決着を図り、伝奏を通じて両宗優如・寛宥を説く史料(G)を発給させた。しかしこれに不満な水戸天台宗は、青蓮院を通じて再論を起した。その結果(2)深増をスケープゴートとして両宗対立の回避が図られ、史料(H)とこれを保障すべく史料(I)が発給された。しかし(3)水戸では依然真言宗の素絹衣着用が続いた。信長の勢(権)力圏外の水戸において「京都之儀」史料(H)(I)は江戸氏に委ねられ、その実現も江戸氏の一存によるほかなかったのである。

おわりに

本稿は、戦国期の常陸国江戸氏領水戸で起きた天台・真言両宗間の絹衣相論をとり上げ、主にその節目となった各繪旨を通じて、関東と京都との間の権威・権力・秩序構造を検討した。相論は、領主権力と結びついた新興の真言宗と平安時代以来の伝統的な天台宗との対立を背景に、天台宗に勅許されたという素絹衣の着用を真言宗が行なったために起きた。まず(一)天文二十四年(一五五五)に震ヶ浦南岸土岐氏領下に所在する関東天台教学の中心逢善寺の役僧で土岐氏寺不動院が比叡山に上り真言宗素絹衣着用不可の繪旨を得たことを検討し、元龜二年(一五七

一)の逢善寺定珍の『素絹記』述作と併せ、相論の範圍を水戸に限定しつつ、相論は関東天台宗にとりひとり水戸のみでなく天台宗全体の問題と認識されたものとし、その上で領主権力とその領国支配を越える宗門・教団の編成原理の異質性を指摘し、さらに素絹衣着用の勅許・僧綱などの天皇權威と不可分な性格を指摘した。次に(二)天正二年(一五七四)七月柳原謀書論旨の発給から論旨の權威には論旨の權威でしか抗しえないことを指摘し、つづく醍醐寺戒光院深増の江戸重通受領口宣伝達と素絹衣着用を検討し、江戸氏と師檀關係を結んだ新興の水戸真言宗とは異なつた水戸天台宗の江戸氏に相對化する天皇に源泉する儀礼的權威を明らかにし、この点に水戸天台宗の水戸真言宗に対する決定的な優位性を求め、相論の本質を水戸真言宗によるこの水戸天台宗の優位性の篡奪にあるとした。さらに(三)水戸天台宗が(二)の問題を青蓮院を通じ奏聞した以降の京都での展開を検討し、折しも伝奏を定め朝廷政治に干与し始めた織田信長の京都における朝廷・寺社政策の中で、信長の意向のもと深増をスケープゴーツに両宗の対立を回避する穩便な政治決着が図られようとしたことを明らかにした。にも関わらず江戸重通はこの「京都之儀」を顧みず、水戸真言宗の素絹衣着用は続く。水戸は信長の勢(権)力圏の外にあり、信長朱印状の強制力も發揮されない。「京都之儀」は全く当地の領主権力江戸氏に委ねられ、その実現も江戸氏の一存によるほかはなかつたのである。

戦国期、天皇を源泉とする統一權威・權威秩序に内在しつつ、權威と権力とを一体に體現する統一権力機構であつた足利將軍家・室町幕府の畿内近国権力への矮小化と関東(古河)公方の後北条氏の傀儡化により、権力は各大名・領主権力に分割・分有され、大名・領主権力はその領域内での権力の一元化と権力としての自立化を達成する。常陸国では北部に、鎌倉期に常陸介、建武二年(一三三五)初見の貞義から応永三十二年(一四二五)就職の義憲にかけて常陸国守護職が確認され、戦国期義昭が右京大夫を得、子の義重が前述のように従五位下常陸介に叙任された佐竹氏があり、中部には、応永(一三九四―一四二八)末頃に大掾氏を追放して水戸入城を果し勢力を拡大し

ていった江戸氏、府中にその大掾氏、南部には土岐・小田氏など図1のように諸氏が割拠した。南部諸氏は佐竹氏とは対立関係にあった。北中部の諸氏は佐竹洞中として佐竹氏を盟主とした緩やかな結合・集団を形成し、その軍事指揮下にあったが、洞中諸氏は領主権力としてそれぞれ自立した存在であった。主従関係を示す指標のひとつである受領補任でいえば、江戸氏は但馬守を、佐竹氏ではなく、水戸天台宗の中核薬王院を通じて青蓮院の奏請を以て得ていたのであった。またこうした江戸氏の自立性は京都においても十分認識されるところであった。絹衣相論でいえば、関東と京都との関係において、常陸国守護職が機能していたならば、義重の常陸介に実質的な権限が付与されていたならば、水戸天台宗は真言宗寄りながらも江戸氏の上級権力になるはずの佐竹氏に訴出したであろうし、京都本寺も佐竹氏に対して史料(II)の実現を促したであろう。だが京都本寺が史料(II)の実現を促した相手は江戸氏であった。上洛した薬王院尊仁の依頼もあつたであろうが、京都においても江戸氏が水戸における唯一の権力体であることを認識していたのである。

権力の割拠性とは対蹠的に、天皇を源泉とする統一権威・権威秩序は再生産されていく。これは公武の俗とともに、宮門跡・僧綱など、寺社、宗門・教団をも編成するものである。したがって、統一権威・権威秩序を検討するにあたつてはこの寺社、宗門・教団を祖上に置かなければならない。宗門・教団は本寺を頂点に本末関係の整備や檀越の獲得によって組織および経済基盤の強化を図る。とくに本末関係は、大名・領主権力の支配領域にありながらもこれを越えて展開していく。また、衆徒も統一権威・権威秩序に基づく宗門・教団秩序に求心的な動きをみせる。個別の大名・領主権力の領域支配研究では現れにくい統一権威・権威秩序も、ここでは日常的に実感していたに違いない。常陸国水戸で起きた絹衣相論が常に綸旨をめぐる展開していくのも、綸旨に権威を認め、それは江戸氏の武力による権力の上位にあり、江戸氏の権力は綸旨に従うべきものとの認識があるからである。史料(II)発給後の常陸国天台宗では史料(II)の発給を喜んだが、史料(I)を喜ぶ声はなくそれは上洛した薬王院尊仁にみるのみで

ある。信長権力の勢（権）力圏外常陸国では信長朱印状でさえも認知されなかったのであり、綸旨のみが唯一の權威として迎えられたのであった。

私は、すでに大名・領主の、菩提所僧のみならず、自身の本寺指向を明らかにした。⁽¹⁰⁾ 大名・領主は菩提所僧の彼が属する宗門・教団秩序への求心を支援するが、その背景には菩提所を通じて自身の宗門・教団への信仰心があつたのである。絹衣相論における江戸氏の態度もそうした信仰心のひとつの現れといえよう。官途・受領補任は勿論、私はこの点からも大名・領主権力が宗門・教団とともに統一權威・權威秩序の内部にあつたと考えている。さらに私は、武士の武力が權威秩序の内部における権力機能を担つたと展望している。権力機能の統一機構が室町幕府であつた。権力の割拠化は、統一權威の源泉天皇と大名・領主権力との間をより直接的かつより複線的なものにし、權威と権力とをめぐる新たな環境をうみだしたといえよう。私は、新たな統一權威はこの權威・権力關係の一体的再編を実現したところに成立すると展望する。

註

- (1) 渡辺世祐「戦国時代関東に於ける天台真言両宗僧徒の争鬭」『仏教史学』第一編一一・一二号、一九二二年。
- (2) 宮田俊彦「戦国時代常陸国天台・真言両宗の絹衣相論」『歴史地理』第九一卷一号、一九六四年。
- (3) 「仏教諸宗の発展」『水戸市史 上巻』、一九六三年。
- (4) 『茨城県史料 中世編Ⅰ（以下「茨城Ⅰ」と略称）』、『不動院文書』解説、一九七〇年。『茨城県史料 中世編Ⅱ（以下「茨城Ⅱ」と略称）』、『吉田薬王院文書』解説、『同』『六地藏寺文書』解説、一九七四年。『茨城県史料 中世編Ⅲ（以下「茨城Ⅲ」と略称）』、『千妙寺文書』解説、『同』『和光院文書』解説、一九九〇年。『茨城県史料 中世編Ⅵ（以下「茨城Ⅵ」と略称）』、『輪王寺文書』解説、一九九六年。
- (5) 「佐久山方と醍醐寺末の真言宗（菊地勇次郎氏執筆）」『茨城県史 中世編』、一九八六年。
- (6) 『茨城県史料 中世編』各巻解説。『茨城県史 中世編』提領子「中世常陸における真言宗教団の展開について」『茨城県歴史館報』三、一九七六年。
- (7) 『茨城Ⅲ』『千妙寺文書』一五九号。

(8) 『茨城Ⅱ』「吉田薬王院文書」一五八号。青蓮院門跡は尊鎮死去のち伏見宮邦輔親王第六王子尊朝が継職するが、尊朝は天文二十一年八月生、弘治元年後継として入室、永禄元年十二月に正親町天皇猶子として曼珠院覚恕准后を戒師に得度し法名を尊朝とし、同六年十二月親王宣下。本文書は門跡不在に関わらず書止を「依青蓮院宮御気色執達如件」とする。形式上は宮門跡の意志を奉じ伝達する令旨であるが、事実上門跡寺院青蓮院としての機関文書である。門跡位は空位であっても制度上規定され、その機能は維持される。「青蓮院宮」の權威は、当職の人物にあるのではなく、職制上の地位にあるのである。同様の例としては足利義氏死後の古河公方家が奉行人連署で関東十刹の公帖を発給したことがあげられ、これには後継職後の公方署判が約束されている(『神奈川県史』資料編3古代中世3下一八八七四・八八七五号)。

(9) 『茨城Ⅲ』「千妙寺文書」一二二・二九・三七号。

(10) 『茨城Ⅲ』「宝幢院文書」解説。澄恵は明応七年、俊聰は天文三年、源雅は同十六年に常陸入国(『茨城県史中世編』)。堯雅は天文十九年・永禄三年・元龜二(三年・天正四)五年の四度常陸入国を果した(『堯雅僧正關東御下向四度之記』『醍醐寺文書』)。また東寺宝菩提院亮恵は、大永六年・享禄五年・弘治四年の三度常陸入国を果し、二回目には佐久山方の流伝域にも足を延ばしているが、多くは実勝方の流伝域を中心に廻った(櫛田良

洪『近世関東東寺教団の成立』『大正大学研究紀要』一九六七年)。

(11) 『大日本仏教全書』七四。

(12) 『願泉寺文書』(東京大学史料編纂所影写本)。

(13) 同前。

(14) 同前。

(15) 『茨城Ⅱ』「吉田薬王院文書」一六一号。なお『茨城Ⅰ』「不動院文書」一一号および『願泉寺文書』の写しに比較し、引用史料は文言として良質である。

(16) 『茨城Ⅰ』「不動院文書」解説。

(17) 『茨城Ⅰ』「逢善寺文書」解説。

(18) 『茨城Ⅰ』「逢善寺文書」一六号。

(19) 註(16)。

(20) 註(10)。

(21) 補註 野内 一九九五年 所論。

(22) 史料(A)と水戸天台宗とを直接結び付ける史料は確認されていない。しかし次の史料は、相論において不動院と水戸天台宗が連繫をとったことを示す。

(1) 幸便之条令啓候、仍去比不動院上洛之刻、可被差上使僧と相待申候処無其儀、余御油断不可然候、如此被輕朝恩御無沙汰ニ候へ者、以来台家御奏聞も不相叶仕合候哉、然者真言宗得便、企造意候者、併御宗門可為滅亡候、被成御書候て、可然之旨洞翁申入候へ共、御無興故無其儀候、急度被差上使者、先如形御礼被申入可然候哉、尚富入可被申候、恐々謹言

八月十六日

（倉屋小路）
經孝（花押影）

藥王院床下

（『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一六一六号）

(2)、幸便之条令啓候、仍就彼一儀、去春御使僧無沙汰之条、定而不動院上洛之刻と相待申候処、無其儀候、公私失面目為躰候、為門跡被成御書候、中く藥王院へ□不被仰越候、各被仰談、年内ニ先如形朝儀之御礼被申上様ニ御才覚肝要候、如此京儀と御不通之様ニ候者定而真言宗得便、種々之可企造意候哉、然者宗門滅亡之基候哉、御分別肝要候、尤以書中可申候へ共、観音寺へも右之通御意得可然候、以外急便ニ候之間、書狀之躰無正躰候、恐々謹言

八月十六日

（倉屋小路）
經孝（花押影）

中道院床下

（『同前』「同前」一七一七号）

差出の青蓮院坊官鳥居小路經孝は、天正二年で三〇歳、天文二十四年では一一歳である。父經孝は天文十八年に死去しており（『地下家伝』）、若年にて家督にあつたと思われる。しかし後述のように相論は実質經孝の奔走により史料(I)の発給をみたと思われ、それを含意しての「御礼」とするならば、史料(1)(2)は史料(I)の後年となる。史料(1)(2)にみる不動院の上洛が相論に関わつてのものは不明だが、これにより相論につき不動院と水戸天台宗とが連繫していたことは間違いないところである。

(23) 『御湯殿の上の日記』天正四年六月二十八日条。

(24) 井筒雅風『法衣史』雄山閣、一九七四年。

(25) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一六二号。

(26) 註(24)。

(27) 『茨城Ⅱ』「六地藏寺文書」一六号。

(28) 『茨城県史 中世編』。

(29) 『群書類従』二九。

(30) 同前。

(31) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一二四号。

(32) 藤木久志「常陸の江戸氏」（『江戸氏の研究』名著出版、一九七七年）。

(33) 『茨城Ⅲ』「和光院文書」解説。

(34) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一〇一・一〇二号。

(35) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一七八号。

(36) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一六三号。

(37) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一二〇号。

(38) 同前。

(39) 同前。

(40) 註(34)一〇二号。

(41) 同前。

(42) 註(37)。

(43) 『茨城Ⅱ』「吉田藥王院文書」一六四号。

(44) 『茨城Ⅵ』「輪王寺文書」一四号。本文書は充所を欠く

が、「親王御方御文 御返事／青蓮院とのへ 誠仁」とするうわ書をもつ。

(45) 『公卿補任』天正三年条。

(46) 注(36)。

(47) 上那珂西村、永正八年に宥秀建立。野田村、天文六年に宥宝建立、増井村、由緒不明。以上は彰考館蔵の寛文三年の開基帳を典拠とした『茨城県の地名』(平凡社、一九八二年)による。

(48) 『中世鑄物師史料』(法政大学出版局、一九八二年)第一部一七三号など。

(49) 『吉田薬王院文書』中に史料(B)が写しとられたのは、これが謀書繪旨が水戸真言宗側が資定に働きかけた謀書であるとする証拠資料とされたためであろう。

(50) 註(26)。

(51) (天正五年)七月九日付で鳥居小路経孝は「委曲馬頭院へ申渡候」と薬王院へ書状(返書)を認めている(『茨城II』『吉田薬王院文書』一一一五号)。

(52) 註(32)。

(53) 註(34)一〇二号。

(54) 江戸通泰(重通曾祖父)は、薬王院造営に干る掟書(『茨城II』『吉田薬王院文書』一五〇号)で、「へつたうさまミとのきねんニ御さうゑいのあいた、御いであるましき事、かたく申さため候」とし、大永七年六月二十三日付の書状(返書)(『同』『同』一五一号)では充所「吉田別当」の脇付に「尊答」を置いている。こうした尊意は、以降みえなくなるが、もともとの江戸氏と薬王院との関係を示唆するものである。

(55) 『茨城II』『吉田薬王院文書』解説。

(56) 註(34)一〇一号。

(57) 『茨城II』『吉田薬王院文書』一六四号。

(58) 『茨城III』『千妙寺文書』一五一号。天台水戸十か寺の内には法円寺・如意輪寺・円福寺などの千妙寺末があり(前出『茨城県の地名』)、千妙寺も相論に何らかの動きをみせたものとも思われる。

(59) 『茨城II』『吉田薬王院文書』一一〇五号。

(60) 註(45)。

(61) 『御湯殿の上の日記』天正三年八月四日条。

(62) 註(12)。

(63) 同前。

(64) 註(44)。

(65) 織豊政権における伝奏を概観したものに伊藤真昭「織豊期伝奏に関する一考察」(『史学雑誌』第一〇七編一第二号、一九九八年)がある。

(66) 『泉涌寺史 資料編』『泉涌寺文書』一一二六号。『泉涌寺史 本文編』法蔵館、一九八四年。

(67) 造営計画はもともと天正元年に泉涌寺から計画されたもので、資力が伴わず正親町天皇の信長への勅命で実現したとされている(前出『泉涌寺史 本文編』)が、公家衆の家々造成と関連づけて考えると、泉涌寺造成も同寺の窮状に応えた信長がすすんで申し入れたものと思われる。

(68) 『公卿補任』。

(69) 奥野高広『増訂織田信長文書の研究 下巻(以下『信

長」と略称) (吉川弘文館、一九八八年) 一四九三号。

(70) 『中世鑄物師史料』第一部一七二号。

(71) 『醍醐寺文書』第三三函、

(72) 『信長』一五七五～五九九号。

(73) 『信長』一五九九号解説。

(74) 下村信博『戦国・織豊期の徳政』吉川弘文館、一九九六年。

(75) 『信長』一五〇四号・五〇六号。

(76) 『茨城Ⅵ』『輪王寺文書』一五号。文書は「勅問 三宝院御請」の端裏書をもつ。

(77) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一八二・一〇三・一〇八・一〇九・一一二号。

(78) 註(71)。

(79) 『醍醐寺文書』第二四函。

(80) 註(2) 所収六地藏寺文書「庚川」聖教奥書。

(81) この「御文言」は、その文言は伝わらないが、天正二年七月の謀書論旨の前提であつて、謀書論旨は根来寺から仁和寺の奏聞によつた体裁をとつて出されたと考えられている(註(2))。相論関係文書での「去年」は昨年の意で使用されているので、これに従うならば、「御文言」は天正三年のものとなる。「去年」を昨年以前とするならば先行研究に従う余地もあるが、「去年」が天正三年であるとするとは先行研究には従えない。

(82) 註(12)。

(83) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一七八号。

(84) 『茨城Ⅵ』『輪王寺文書』一 号。

(85) 註(12)。

(86) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一六五号。

(87) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一六六号。

(88) 『茨城Ⅵ』『輪王寺文書』一三 号。

(89) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一九九号。

(90) 『茨城Ⅵ』『輪王寺文書』一〇 号。本文書は「三宝院殿 信長」の礼紙うわ書をもつ。

(91) 『栃木県史 史料編・中世Ⅱ』『輪王寺文書』一〇五号。

(92) (天正五年) 仲春(二月) 二十三日付薬王院充宗光寺乗海書状(『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一八六号) は、「去年上洛、彼一義御調、重而 論旨被請御申候事、貴院無御稼者難叶候」とし、相論に関する薬王院尊仁の京都での働きを賞している。

(93) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一六七・六八・七〇・六九号。

(94) 註(93)七〇号松羅本書入れに「天正四年丙子十月十五日、吉田山別当内供奉尊仁申請候而令持参候而達理運之書状」とあり(註(2))、註(93)発給に尊仁の発給願を想定できる。なおこの年に尊忠は僧上に補任されたが、本稿では行論から除外した。

(95) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一〇六号。

(96) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一〇七号。

(97) 『茨城Ⅱ』『吉田薬王院文書』一一八号。

(98) 『茨城VI』「輪王寺文書」——一一号。

(99) 『茨城II』「吉田薬王院文書」——一五号。

(100) 天正四年説は「内符」の人物比定を行わず、また史料(I)を看過して同五年の信長による処罰が生前復権不可能な重罰とみなし、深層はこれより先にいちど処罰を受けているとの理解に基づく誤説である。

(101) 横内裕人「仁和寺御室考」『史林』七九卷四号、一九九六年。三宝院と同様の勅問は仁和寺御室にも出され、任助は門下の素絹衣着用不可の諸文(『茨城VI』「輪王寺文書」——三号)を提出している。ただし綸旨・信長朱印状の充所が三宝院に限られているのは、仁和寺御室のそうした位置によるものであろう。

(102) 註(3)。

(103) 『信長』一六〇七号。なお同日付で陸奥国三春城主田村清頭や下野国小山城主小山秀綱にも同趣旨の朱印状(『信長』一六〇八・六〇九号)を発給している。

(104) 『御湯殿の上の日記』天正四年六月八・二十七日条。

(105) 註(32)。

(106) 宗光寺乗海は(天正五年)仲春(二月)二十三日付薬王院充書状(『茨城II』「吉田薬王院文書」——一八六号)で「去年上洛、彼一義御調、重而 綸旨被請御申候事、貴院無御稼者難叶候、就中從 青蓮院宮御令旨并上乘院僧正・鳥居小路大藏卿書状具令被見候」とするが、信長朱印状に触れるところがない。この書状は綸旨に比べ信長朱印状に対する認識のうすさをものがる。

(107) 『日本史総覧』II・III 新人物往来社、一九八四年。

(108) 市村高男『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版、一九九四年。

(109) 註(22)(1)中の「洞翁」は佐竹氏を指す可能性が高い。とするならば、青蓮院では佐竹氏を常陸国における上級権威・権力との認識をもっていたことになるが、これまでに述べた相論の経過にはそうした認識は現れない。とはいえ権力関係の実態的認識は別にしても京都において佐竹氏が常陸国における上級権威であることの認識はあったものと思われる。市村氏は、洞の形成を戦国期の所産とし、さらに佐竹氏の洞中諸氏領の佐竹領認識と諸氏の佐竹氏への帰属意識を指摘し、佐竹「洞」を領域の権力の一元化を達成した後北条氏などの「分国」に比するものとしている(註(108))。私は、洞中の自立性の担保に、洞が権力の割拠という戦国期の政情を反映したすぐれて戦国期の所産のひとつたることを窺う。

(110) 拙稿「後北条氏と神社」『ヒストリア』一五八、一九九八年。

(補) 本稿脱稿後、野内正美「江戸氏の発展と絹衣相論」(『那珂町史の研究』七、一九八七年)、同「絹衣相論と江戸氏」(『茨城町史 通史編』一九九五年)に触れた。「和光院和漢合運」を引き和光院慶岳が穴戸四郎であることを示したこと(一九九五年所論)に留意したいが、本稿の意義を失わせるものではない。

